

自立活動だより No. 8 (高等部)

令和2年3月13日
大宮ろう学園 自立活動部

高等部 特別講演会「映画を通して見えてくる世界」を開催しました [R1.12.20]

「ろう者として自分の生き方を切り開くことの大切さを学ぶ」ことを目的に開催されました。



映画好きだった牧原さんは、イタリア旅行中にローマ国際映画祭に参加して、様々な国のろう者が作った映画に感銘を受け、日本にも広めることを決意。働きながら専門学校へ通学し、在学中に撮り貯めた「リッスン」を公開する。ろう者にとっての音楽、ろう者が楽しめる音楽とは何かを追求し、リズムや手で楽しむことを提案することで、ろう者の音楽が存在していることをアピールしている。その後、ご自身の活躍している内容を楽しく具体的に話された。後半は短編映画「THE END」を視聴した。主人公の過去→現在→未来の時間の流れの中で、医療技術の発達によりろう者が健聴者になれる治療が確立し、治療を拒否し続けた主人公が世界で最後のろう者になってしまうもので、ろう社会やろう文化、手話の在り方を深く考えさせられるものだった。その後、4名程度のグループで「150年後にろう者が消滅しているか残るのか、手話はどうなるか」のテーマでディスカッションを行い、発表した。



講演後の生徒の意見が多かったのは「ろう者とはどういうことか、健聴者との関係や立場は何なのか、ろう者の幸せや辛さなどを深く考えさせられた」ということでした。同時に「ろう者であることを誇りに思う」「手話を大切に残したい」という一方で、「健聴者になれる治療を受けたい」「一日も早く健聴になりたい」という意見もありました。

なによりも牧原さんの行動力に感銘を受けたようで「自分に必要な情報保障を強く伝える姿がかっこいい」「健聴者に自分の考えをしっかりと伝えることが必要」「会話のためにはコミュニケーションをとることが大切だ」という意見も多かった。そしてディスカッションを通じて仲間のいろいろな考えを聞いたことも、とても貴重な機会であったと多くの生徒が感想に記していた。



講師 牧原依里 (映画作家)

【経歴】

ろう者の「音楽」をテーマにしたアート・ドキュメンタリー映画『LISTEN』(2016)を共同監督。仏映画『ヴァンサンへの手紙』の配給宣伝など担う。2017 東京国際ろう映画祭開催。既存の映画が聴者による「聴文化」における受容を前提としていることから、ろう者当事者としての「ろう文化」の視点から問い返す映画表現を実践。

